朝さろんの本棚〈27〉
李良枝『由熙』について

27th morning : 2013 年 9 月 12 日(木)@渋谷
参加者： 7 名

「由熙」は、
日本と韓国との民族にまたがる問題と個人のアイデンティティの問題の間にあって、さらに＜言語＞の狭間で引き裂かれるという歴史の根深い傷痕をも感じさせる作品。

【テーマ】

〈歴史の中の小さな声（３）完〉

【本】

李良枝「由熙」（『由熙／ナビ・タリョン』講談社文芸文庫，1997）
［初出：「群像」1988 年 11 月号、単行本：1989 年 2 月講談社刊］

【李良枝(イ ヤンジ)】

李良枝（이양지、1955 年-1992 年）は、在日韓国人二世の小説家。帰化後の本名は田中淑枝。山梨県南都留郡西桂町生まれ。小学生のときに両親が日本国籍を取得したので、同時に彼女も国籍は日本となる。山梨県立吉田高等学校から 1973 年に京都府立鴨沂高等学校に編入。1975 年早稲田大学社会科学部に入学するが、1 学期で中退。1980 年 5 月にははじめて韓国を訪れ、以後は往来を繰り返し、巫俗舞踊（ムソク）や伽耶琴（カヤグム）、語り歌（パンソリ）などの影響を受ける。1982 年にはソウル大学校国語国文学科へ入学し、留学中に書き上げた「ナビ・タリョン（나비타령）」を『群像』に発表し、第 88 回芥川賞候補となる。1988 年にはソウル大学を卒業し（卒業論文は「パリコンジュ（捨て姫）とつながりの世界」）、『由熙』（ユヒ、유희）で翌 89 年（平成元年）の第 100 回芥川賞を受賞。梨花女子大学舞踊科大学院修士課程に学びつつ、1992 年には長編「石の聲」の執筆を手がける一方で妹の四ヶ国語情報誌『we’re』の創刊を手伝っていたが、5 月 22 日に急性肺炎を罹患し、ウイルス性の心筋炎を併発してまもなく死去した。享年 37。

【ストーリー】

在日韓国人 2 世で 27 歳の「由熙」が、自らのルーツを尋ねて韓国に留学するが、韓国語ができず、祖国朝鮮と日本の狭間で、言葉を通して自己のアイデンティティを模索しながらもがき苦しむ姿を、下宿先の「私」の視点と回想で描いた作品。

【議題】次の問いについて考えてみましょう。

Q１：
テグムも習わず、岩山にも登らないまま「――私は見ているだけでいいの」（p322）という態度を由熙が頑なに取り続けたのはなぜでしょうか？

a. 韓国での留学生活に疲れすぎ、気力を欠いているから。
b. それをやっても得たいものが得られないのをわかっているから。
c. 神聖視している対象であり、よそ者である由熙が手を出していいものではないから
d. その他

Q２：
「今、由熙がいたなら、と無性に思った。今、由熙がいたなら訊いてみたいことが沢山ある。問いかけ、確かめたいことが沢山ある」（p331）とありますが、オンニが訊ねたかったこととはどんなことでしょうか？

a. あなたは日本人なの？韓国人なの？
b. あなたは母国・韓国へ本当は何をしようと思ってやって来たの？
c. その他

Q３：
「机の前にかがみこみ、狭い空間に自分を押しこんだ由熙が、テグムの音を聴き、右手に楽器を見ながらそれらの文字を（日本語で）書き綴っている姿」（p346）という描写が作中で反復されますが、この様子はどんなことを意味していると解釈できるでしょうか？

【解題】「由熙」について

『由熙』は主に 1980 年頃が作品の背景となっています。前二作と違い戦争は直接的には描かれません。しかしそれは戦争と無関係であることを意味しません。むしろ、正史としての戦後史から零れ落ちた「在日コリアン」の寄る辺なさを描いているという点で「歴史の中の小さな声」という主題を強く意識させます。

このことは、本書の舞台が日本ではなく韓国であること、作中ではその韓国から由熙が既に旅立っており「私」による過去の回想という〈不在〉を強く印象づける設定からも喚起されることでしょう。日韓双方の正史・正統から外れ、隘路に落ち込んだ存在としての由熙の存在が際立ちます。

由熙は虚構の人物です。しかし、歴史に翻弄されてディアスポラになった人たちが、李良枝ら在日コリアンを始め、多数存在していたことはまぎれもない事実です。

今シーズンの完結編として「由熙」を読みながら、そこに刻まれた声に耳を傾け、何を聴き取ることができるのか、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。

〈歴史の中の小さな声〉⇒ 韓国／朝鮮の近代史について

1895 年（明治 28 年）	下関条約、閔妃暗殺（乙未事変）
1897 年（明治 30 年）	大韓帝国に国号変更
1909 年（明治 42 年）	韓国併合を断行する方針を閣議決定、伊藤博文暗殺
1910 年（明治 43 年）	**韓国併合**
1945 年（昭和 20 年）	分割占領、朝鮮総督府解体、北緯 38 度線以南 アメリカ合衆国が占領、北緯 38 度線以北 ソビエト連邦が占領
1947 年（昭和 22 年）	5.2 **外国人登録令（見なし外国人として扱う）** 植民地にあった人々（朝鮮人、台湾人たち）を外国人として扱うとした。植民地のもとで「日本人」とされていたものが、外国人登録令によってそのまま外国人とされ、日本人があらたに獲得した権利からはずされることになった。
1948 年（昭和 23 年）	大韓民国建国　　朝鮮民主主義人民共和国建国
1952 年（昭和 27 年）	4.28 サンフランシスコ平和条約発効、日本が朝鮮に対する権利、権原及び請求権を放棄 **外国人登録法（外国人として扱う）** 日本が占領から脱したこの日、この法律とともに通達が出され、朝鮮人や台湾人は日本国籍をもたないとされた。植民地出身の人々は、外国人とされた。 *2012 年に廃止、新しい在留資格制度に変わったが、それでも日本人／外国人という線引きは変わっていない。
1965 年（昭和 40 年）	日韓基本条約調印 発効、日本は大韓民国を全朝鮮の正統政府として承認

１．ぶ厚い茶封筒に入っていたものは何か？なぜ「私」に預けたか？

小説としての本作がストーリー上で投げかけている最大の問いはこれだろう。今回の議題の３点は、この問いに答えるために考えるべきポイントの一部といえる。

ぶ厚い茶封筒を引き寄せ、机の上に中味を取り出した。（略）表紙のその一枚をめくった。（略）四百四十八枚の事務用箋には、初めから終わりまで、由熙の日本語の文字が書き連

ねられていた。私には日本語が全く読めなかった。(p308)

この便箋に綴られた日本語を読んだ「私」の反応は次のとおり。

読めるのは知っている漢字だけだった。その漢字を追い、辿り、書かれている内容を想像しようとしてみた。すぐに諦めた。無駄だとわかった。だが、それでも目をそらすことができなかった。文字が、息をしていた。声を放ち、私を見返しているようだった。ただ見ているだけで、由熙の声が聞こえ、音が頭の中に積み上げられていくような、音の厚みが血の中に滲んでいくような、そんな心地にさせられていた。(p309)

「私」の感想⇒「由熙はこれらの日本語を書くことで、日本語の文字の中に、自分を、自分の中の人に見せたくない部分を、何の気がねも後ろめたさもなく晒していたのだと思えてならなかった」(p310)

「自分の腕の中には、由熙の文字が束ねられていた。私は文字となった由熙を抱きかかえているような気がした。目に焼きつき、刻まれた文字の連なりが、まるで絵のようになってよぎっていった。聞こえてくる声は文字であり、文字が音となって響いてくるようだった。紙の束の感触が胸を伝わり、胸の奥の小さな塊と触れ合って、私のからだの中に由熙の声を響かせていた」(p324)

「私」の記憶の中で由熙は、

(叔母は、) 机の前に坐った由熙が、そこに自分を閉じこめるようにカセットデッキを置き、机を壁に引き寄せていたことも知らないはずだった。そこで由熙は四百四十八枚の日本語の文章を書き綴っていた。テグムを聴き、その音をウリマル(母語)と言い、音以外の実際のハングル文字を読むことも書くこともせずに、ある日は日本語の朗読をしてもいたのだ(p332)

2．共感という「翻訳」作業

「由熙」のような小説にあって、“日本の中の外国人”であることの苦しさを読者はどのように理解することができるだろうか？ そこには体験の「翻訳」とでも呼ぶような働きが差し挟まれる。その「翻訳」を行うのが“共感”である。

「われわれは想像力によって自分自身を彼の状況において、彼と全く同じ苦しみに耐えていると想像する。われわれはいわば彼の身体の一部になり、そしてある程度まで彼と同一人物になって、そこから彼の感覚について何らかの観念を形成し、彼の感覚より程度において弱いとはいえ、その感覚と全く似ていなくもない何かを感じさえする」

『**道徳感情論**(上・下)』アダム・スミス/水田洋訳(岩波文庫、2003)

① 想像上の立場交換、
② 立場交換の結果として生じる共感的感情、
③ 共感的感情と他者のもとの感情の一致、
④ 一致の結果として生じる是認の感情、

⇒これら一連の作用を“共感”と呼ぶ

3．在日コリアンについて

最初に朝鮮からやってきた人を一世、その子どもの世代を二世といい、現在はおおよそ 55 万人、五世までいる。

在日コリアン一世

「…日本の戦争に協力し、それに狩り出され、その傷痕を背負うて、いまなお日本の社会のなかで安定した職業ものうて生活の保障ものうて、日本のなかでギリギリに生きとる。そういう同胞たちのことを深う考えてやっていただきたい」

（鄭義信『焼肉ドラゴン』）

在日コリアン二世

「私はまさに、誕生の瞬間から割れていた。…私は生まれたとき日本の朝鮮支配によって作られた“日本人”であった。そしてこの“日本人”は、日本人としての自我が形成されるまさにそのとき、今度は日本の敗戦によって日本から追放され“朝鮮人”となった」

（高史明『生きることの意味・青春篇』）

在日コリアン三世

-「俺もさっきまで、日本人の女の子と付き合ってました」
-「さっきまで？」
-「どうでもいいようなこと気にする子で、＜バンダム＞じゃなくて、＜ヴァンダム＞だとか、＜マコーレ＞じゃなくて、＜マコーレー＞カルキンだとか。自分はパンツ見られても気にしないくせに」
-「最高じゃん」
-「かわいかったっす…本当に好きだったんすよ。今まで差別とかされても全然平気だったんすけど、なんか彼女と出会ってから、急にびびっちゃって。よく考えたら、今まで本当に大切な日本人に出会ってなかったんですよね。ずっとひっかかってて。でもまあ、言ってみたんですけど。俺、在日だって」
-「そうしたら？」
-「＜恐い＞って」
-「ありゃ」
-「俺、自分の肌の色が緑色だったらいいのにって、本気で思う時ありますよ。そうしたら自分が在日だって忘れなくてすむし、恐いって言う奴は最初っから近寄ってこないし」

-「俺も、お巡りさんの制服がもっとダサかったらいいのになあ、って思うときがあるよ。セーラー服とか、レオタードとかね。そうしたら、誰も俺に道聞いたりしないじゃん。」

（金城一紀『ＧＯ』）

-「俺は何人だ！俺は何人だ！何者だよ！答えろよ！俺は何者だよ！」
-「在日韓国人」
-「どうして何の疑問もなく、俺のこと＜在日＞なんて呼べるんだよ！＜在日＞って呼ぶってことはなあ、俺がいつかこの国から出て行くよそ者だって言ってるようなもんなんだよ！それわかって言ってるのか！俺は時々、お前ら日本人をどいつもこいつもぶっ殺したくなるよ！お前ら俺が恐いんだろ！名前付けなきゃ不安で仕方がないんだろ！なあ！？じゃあ、俺はライオンだよ！ライオンは自分のことライオンだなんて思ってないからな！お前らが勝手に付けた名前じゃないか！調子こいて近づいてみろ、頚動脈に咬みついて、咬み殺してやるぞ！名前なんて何だっていいんだよ！マムシでも、サソリでも、エイリアンでもいいよ！だけど俺は自分のことエイリアンだなんて思ってないからな！俺は、在日でもエイリアンでもねえんだよ！俺は俺なんだよ！いや、俺は俺であることすら捨ててやる！クエスチョンだ！ハテナマークだよ！物体Ｘだ！どうだ恐いだろう！なあ！？何黙ってんだよ！何とか言えよ！何なんだよ！ちくしょう！うるせーな、俺は！だから何なんだよ！ちくしょう！」
-「その眼」
-「ああ ！？」
-「その眼、私好きだった」

（金城一紀『ＧＯ』）

４．発表当時の作品評価（第 100 回芥川賞（1989 年 3 月号）の選評より）

・由熙の痛々しい吃音性が、言葉というものの底深い肉体感を鮮烈に刻み上げている。（黒井千次）

・自分自身を韓国育ちの韓国人と在日同胞との二人に分けて描いたために、はっきり結論が出ているようでいて、書き手の心が揺れているのが分かる。（吉行淳之介）

・この作品の独自さは、韓国人女性の目を通して在日韓国人の姿を相対化しながら、既成の共同体感性を越えて生きるという普遍的な戦慄と魅惑を、呼び出したことにある。（日野啓三）

・ソウルの大学の留学生由熙と、彼女の下宿先の年上の娘〈私〉とに、作者の内部がほぼ七三くらいの割合いに配分されている。この作品で作者の書きたかったことを表現するのに、この配分の仕方は実に適切である。通読中、私は言葉の生理性をはじめ言葉の問

題で幾様にも揺さぶりかけられた。
（河野多恵子）

【まとめ】

今シーズンのテーマは当初、〈植民―暴力と被暴力のあいだ―〉というものでした。戦後民主主義体制に端を発するさまざまな“植民”の構造を、短編小説に刻まれたさまざまな歴史の断片から拾っていきたいと考えていました。

今シーズンで取り上げた「人間の羊」「カクテル・パーティー」「由熙」を読むとわかるとおり、ここには人の数だけ思いや考えがあり、語られる歴史は一様ではありません。戦後占領期を体験した人の＜戦後＞、沖縄に住み 1972 年まで本土復帰が叶わなかった人たちの＜戦後＞、そして在日コリアンという“日本の中の外国人”という記憶を背負ってきた人たちにとっての＜戦後＞。私たちは小さな歴史の一断片に響く多声的な意見に耳を傾け、その苦しみに寄り添い、共に葛藤しながら、それを通じて自身の考えを検証していくしかありません。今シーズンとりあげた歴史の声は、あえて中心ではなく周縁にあるものばかりです。しかし、だからこそ、そのことでかえって気付くことも多いのではないでしょうか。「他者の歴史」に目を向けることで、「自分たちの歴史」を相対化し、そのことで生まれる疑問や違和感が、「歴史とはなにか」というところへと思考を誘うのだと思います。

なお「由熙」に関しては、＜歴史＞とは別に、さらに根深いところで＜言語＞の問題が浮上してきました。この＜言語＞については、しばらくの後に、本格的に取り上げてみたいと考えています。

⇒　〈歴史の中の小さな声（３）完〉

次シーズン⇒　〈本棚拝見(リクエスト特集)〉Part Ⅱ
2013 年 10 - 12 月期

※参考文献

・『芥川賞全集 第 14 巻』(文藝春秋、1989)
・『可能性としての「在日」』李恢成（講談社文芸文庫、2002）
・『「在日」という根拠』竹田青嗣（ちくま学芸文庫、1995）
・『いま、私たちの隣りに誰がいるのか』安宇植(編/訳)（作品社、2007）
・『6 stories 現代韓国女性作家短編』安宇植(編/訳)（集英社、2002）
・『戦後日本史の考え方・学び方: 歴史って何だろう?』成田龍一（河出書房新社、2013）
・『韓国現代史』文京洙（岩波新書、2005）
・『韓国併合』海野福寿（岩波新書、1995）
・『ディアスポラ紀行—追放された者のまなざし』徐京植（岩波新書、2005）
・『ソウルの風景—記憶と変貌』四方田犬彦（岩波新書、2001）
・「輪舞する、ソウル」『中上健次全集 第 8 巻』中上健次（集英社 1996）
・『増補 国境の越え方 —国民国家論序説』西川長夫（平凡社ライブラリー、2001）
・『国境お構いなし』上野千鶴子（朝日文庫、2007）
・『日本語の外へ』片山義男（筑摩書房、1997）
・『日本語を書く部屋』リービ英雄（岩波書店、2001）
・「「由熙」李良枝--ある飛躍」日野啓三（「新潮」86(5), 1989）
・「「言葉」への懐疑--李良枝(イヤンジ)「由熙」の世界」岡野幸江（「社会文学」(11), 1997）
・「世紀末の日本女流文学 : 美と思想と方法を中心に」千葉宣一（「北海学園大学人文論集」10, 1998）
・「想像的世界,小説への道--乱舞するナビ・李良枝(前篇)」顧偉良（「弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要」(35), 1999）
・「<文字>という「ことば」--李良枝「由熙」をめぐって」上田敦子（「日本近代文学」(62), 2000）
・「李良枝の作品にみる在日朝鮮・韓国人の民族意識」金克美（「佛教大学総合研究所紀要」2000(1), 2000）
・「ソウルの異邦人、その周辺 : 李良枝「由熙」をめぐって」申銀珠（「新潟国際情報大学情報文化学部紀要」7, 2004）
・『立命館言語文化研究』立命館大学国際言語文化研究所（19 巻 3 号、2008）

※『由熙』参考資料　※

アジアと向き合う:戦後６８年のニッポン／３　「嫌韓」に共感した自分、客観視
毎日新聞　2013 年 08 月 04 日　東京朝刊

◇「在日」葛藤乗り越え

韓流ショップが並ぶ日曜午後のコリアタウン。６月１６日、東京・新大久保で在日コリアン排斥を訴えるヘイトスピーチデモが始まった。在日３世の李永皓（リヨンホ）さん（２５）は、プラカードを掲げ、過激な言葉を繰り返すデモ隊に抗議した。あのころは、在日でありながらネット右翼に共感していた。もしかすると、今ごろ向こう側にいたかもしれない。「朝鮮人をたたき出せ」。そう叫ぶデモ隊の姿が、かつての自分に重なった。

在日２世の父と韓国籍を取得した日本人の母の間に生まれた。父の勤務先は韓国企業。生後すぐ横浜からソウルへ転居し、小学３年で大阪に引っ越すまで韓国で暮らした。「日韓は一つの国」。幼い頃はそう思っていた。顧問とそりが合わず、高校のサッカー部を２年でやめてしまった。「あいつは韓国人だ」。人の目が気になった。陰口を言われている気がした。

大学に入っても、授業に出席できなかった。気力が湧かず、山手線に乗ったまま都心を回って帰った。韓国を否定的に描いたマンガ「嫌韓流」を読み、韓国への反発をあおるサイトを見た。韓国や在日の「真実」を次々に見つけた気がした。

「在日だけど嫌韓に共感する」。ネットの掲示板に書き込んだ。「本当に在日か」「出ていけ」。非難が集まった。「話を聞きたい」という反応もあった。自分を認めてくれているようで、うれしかった。

後に「在日特権を許さない市民の会」（在特会）の幹部となる在日３世のブログを読み、在日に厳しい内容に共感した。別の在特会幹部が唱えた「在日全員送還論」にも賛同した。自分を守るために、ネットで韓国と在日を中傷し続けた。

小学生のころ、サッカー韓国代表が負けると級友に「韓国は弱い、弱い」とからかわれた。中学で日本の首相を批判すると「韓国に帰れ」と言われた。いじめられたと思っても、分かってもらえない。「韓国人の代表として見られるからしっかり生きろ」。母の言葉が重荷だった。

大学２年で転機が訪れた。友人から国際交流サークルに誘われ、韓国好きの日本人の先輩や留学生と知り合った。韓国語で冗談を言い合った。韓国への嫌悪感が薄らいでいった。在日本大韓民国民団が募る母国訪問事業に参加し、同世代の在日と出会った。「差別され、あか抜けない」。勝手に抱いていたイメージとはかけ離れた若者ばかりだった。歌手や落語家として夢を追う若者もいた。やっと自分に素直になれた。在日外国人を研究する友人の聞き取りに、打ち明けた。「自分のコミュニティーがほしかった」

６月２８日夜、東京都中央区。若者が集うトークイベントで、李さんはマイクを握りしめた。「国籍に縛られる必要なんてない」。六本木で半世紀以上、診療を続ける無国籍医師の業績を紹介した。

在日である自分を受け入れられずに悩み、もがいてきた。追い詰められた末、ネットの情報を疑いもせず信じてしまった。自分と向き合うことができて、やっと分かった。

この春、東京の大学を卒業した。秋にはイスラエルに留学する。移民教育や、ユダヤ人と在日コリアンの比較研究をするつもりだ。葛藤を乗り越え、歩み始める。＝つづく